チョン・ミョンフン

フランス国立放送フィルを率い、静岡公演を終えた

香り、色彩 楽団員が再現

14年にわたり音楽監督を務めるフランス国立放送フィルハーモニー管弦楽団を率い、静岡市駿河区のグランシップで4日、ベルリオーズの「幻想交響曲」などを演奏した世界的指揮者チョン・ミョンフンにフランス音楽や日本への思いを聞いた。

―静岡公演を含め、今回の来日でフランス音楽を選んだ理由は。

「まず日本の方々が、フランスのオーケストラでフランスの曲を聴きたいのではないかと思った。2番目はそれが本当に素晴らしいからだ」

―フランス音楽の素晴らしさは、どこか。

「絵画や料理などほかのフランスの文化と同じように、フランスの音楽は味わいや香りが豊か。音楽の香りは味覚と同じ。私は楽団員にドイツの重厚な曲の前にはビールと肉料理、フランス物では食事は少し軽めでお酒はワインを味わってもらっている。フランスの音楽は特に香りの感覚、色彩が大切。フランスの楽団員は生涯それを感じて音楽に再現している」

―日本に対する思いは。

「来日するたび、時間がたつにつれ関係が深まっている。日本の聴衆は世界の中でも素晴らしい。ひとつは注意深く聴いてくれる。演奏後は大変、称賛してくれる。応援してくれる人がどんどん増えている」

―日本ではクラシック愛好家の高齢化が進んでいる。韓国や欧米はどうか。

「欧米はもっと高齢化している。アムステルダムでロイヤル・コンセルトヘボウを振ると、客席は真っ白だ（笑）。日本の聴衆は若い方だろう。韓国はもっと若いが。ただ、聴衆が年を取っていくことは悪いことではない。クラシックは成熟した音楽であり、堪能するためには時間が必要だ。だから年をとった人とともに、若い人に推奨している」

―1997年にアジアの音楽家を集め、創立したアジア・フィルの意義は。

「日本、韓国、中国などアジアを一つに近づける力がある。日韓中は過去には大きな緊張もあった。それが一つになるのは音楽を通してが一番いい。音楽は奇跡を呼ぶ。スポーツも確かに交流の手段としてはある。ただ、どうしても競争が避けられない。人々の心を一つにするのは音楽が一番だと思う」

（俊）

音楽活動の抱負を語るチョン・ミョンフン＝4日、静岡市駿河区のグランシップ

静岡新聞

© 静岡新聞社　無断複製転載を禁じます